

中国語と対応する漢語

日本語教育研究資料

日本語教育研究資料

中国語と対応する漢語

文 化 庁

日本語教育研究資料

中国語と対応する漢語

昭和53年12月11日 初版発行
昭和54年7月25日 2刷発行

文 化 庁
郵便番号 100
東京都千代田区霞が関3の2の2
(581) 4 2 1 1

発 行

大 蔵 省 印 刷 局
郵便番号 107
東京都港区虎ノ門2-2-4
(582) 4 4 1 1

ま え が き

最近、外国人に対する日本語教育の国際的意義について、社会の認識と理解が高まってきてはいるが、この日本語教育の一層の充実を図るためには、その前提となる教育内容・方法に関する基礎的、実際的研究、とりわけ日本語と諸外国語との比較対照研究を推進する必要がある。

文化庁では、従来から外国人に対する日本語教育の振興施策[※]、特に、教育内容・方法の向上策の一環として、国内の主要日本語教育機関に対し「外国人の母国語の語系別教育内容・方法に関する実践的研究」という共通研究課題の下に、3年計画で研究委託を行っている。その研究成果は、毎年度末行われる日本語教育研究協議会における研究発表・討議を通じて関係者の利用に供してはいるが、従来からその研究成果の刊行が強く望まれていたところであった。

今回これらの要望にこたえて、昭和48～50年度に研究を委託した早稲田大学語学教育研究所の研究成果をまとめ、日本語教育研究資料「中国語と対応する漢語」として刊行することとした。現に日本語教育に携わっている方々、またある程度日本語を学んでいる方々が本書を大いに活用することにより、日常の指導や学習に、より効果を上げることができるよう、更に、今後この分野での研究が一層充実、発展するよう期待するものである。

昭和53年11月1日

文化庁文化部国語課長

室 屋 晃

早稲田大学語学教育研究所日本語科について

留学生に対する日本語教育 早稲田大学における日本語教育は、英・独・仏などの外国語教科と異なり、語学教育研究所の日本語科が統括的に運営している。すなわち、日本語科としては、各学部・大学院の第2外国語としての日本語、国際部(米国の大学から1年間留学する学部)における日本語など、正規の科目としての日本語のほか、留学生に対する補習授業としての日本語、入学前に行う6か月の強化授業としての日本語等も行っている。また、日本語の課程には、初級・中級・上級Ⅰ・上級Ⅱの各段階のほか、更に日本語教員・日本研究者等をを目指す者の研修課程(24科目中毎年12科目を開講)も置かれ、国際部では日本語研究のための特別個人指導を受ける道も開かれている。こうして、毎週の授業時間数は260時間~300時間に及び、担当教員も専任7名を中心に総計35名を超えている。なお、学生数も300名に及び、その国籍も25か国以上に及んでいるが、そのうち約半数の150名が中国語を母国語とし、100名余り(主として国際部)が英語を母国語としている。これらのうち初級クラスの場合には、事情の許す限り、中国語を母国語とする者とその他とを別クラスとしている。一方、国際部のクラス(初・中・上にわたって6段階)は英語を母国語とする学生のみで構成されているから、全体としては、母語別に中国語と英語その他(原則として英語習得者)に分け、それぞれに対して効果的な教育を行おうとしているのが現状である。

日本語教育に関する研究 昭和39年度に行った教材作成のための基礎調査に基づいて昭和40年度から教科書を作成し、現在では初級・中級の各教科書とその付属教材(テープ教材を含む。)が授業に使用されている。また、類義語の語彙調査、専門用語集の作成、日本語学力検定(A・B・C・Fの4段階)のための基礎研究、日中・日朝漢字語彙の意味対照などが共同研究として行われている。特に「日本語と中国語との言語構造の対照研究」(文化庁委託研究)は、研究所の中国語研究員(日本人教員)と非常勤講師(中国人教員を含む)の協力を得るとともに、研修課程在学の中国系留学生をインフォーマントとして行われたものである。

目 次

はじめに

第1部 研究の目的と経緯..... 3

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 考察の観点 | 6. 分類作業の進め方 |
| 2. 初中級漢語の選択 | 7. 教育上の扱いについて |
| 3. 辞書からの切り抜き | 8. 漢字を通じての理解 |
| 4. カード分類の進め方 | 9. 中国語訳と漢字の字体 |
| 5. 一部重複の場合の扱い | 参 考 文 献 |

第2部 部類別漢語一覧

- (1) 日中両国語における意味が同じか、または、きわめて近いもの。(S)21
- (2) 日中両国語における意味が一部重なってはいるが、両者の間にずれのあるもの。(O)83
- (3) 日中両国語における意味が著しく異なるもの。(D)99
- (4) 日本語の漢語と同じ漢字語が中国語に存在しないもの。(N)..... 113

五十音順漢語索引..... 145

は　じ　め　に

この報告は、早稲田大学語学教育研究所が、文化庁からの委託を受けて行った研究の一部である。委託研究は昭和48・49・50の3年度にわたり、全体の課題は“日本語と中国語との言語構造の対照研究”ということであった。これについて、実際の研究は大きく二つに分けて行われたが、それは“中国語と対応する漢語について”と“類義漢語の日中対応について”の二つであった。そのうち前者“中国語と対応する漢語について”をまとめたのが、この報告である。

研究を行うに当たっては、早稲田大学語学教育研究所の日本語科専任教員が中心となり、非常勤講師の先生方にもご協力をいただいた。その他、早稲田大学の中国語担当の先生方にもいろいろご教示をいただいた。また、研究を進めるに当たっては、早稲田大学語学教育研究所で日本語を学習中の中国系留学生のうち、主として研修課程の者をインフォーマントとし、また、中国語を母国語とする先生方に校閲をお願いした。

昭和53年9月

早稲田大学語学教育研究所

日　本　語　科

第 1 部 研究の目的と経緯

1. 考察の観点

新たに外国語を学習する場合、母国語で得た知識が利用できれば、それだけ効果的だということもある。その立場で考えると、中国語を母国語とする者が日本語を学習する場合、漢字についての既習知識を利用すべきだということになる。これが、ここに“中国語と対応する漢語”を取り上げたそもそもの動機である。

中国語と日本語は、共に漢字で書き表されている。そのために、日本語を母国語とする者が中国語に接したとき、日本語と同じ漢字の中国語に親しみを感じる。同じように、中国語を母国語とする者が日本語に接したときにも、中国語と同じ漢字の日本語に親しみを感じる。この場合、日本語としての発音と中国語としての発音は異なっているが、意味のほうは同じものが多い。そうして、意味が同じものについては、それだけ学習の負担が軽くなるわけである。

そういうことを考えると、中国語を母国語とする者が日本語を学習する場合、二重の利益を受けることができる。その一つは、漢字というものに親しみを感じているため、それを文字として目にとらえる訓練がすでに終わっているということである。もう一つは、それぞれの漢字が意味を持っているため、漢字で書かれている日本語を見て、その意味を知ることができるということである。こういう点は、漢字というものを全く知らない他の外国人が日本語を学習する場合に比べ、著しく有利である。日本語を教える立場でも、こういう有利な点を積極的に利用すべきである。

しかし、実際問題として、同じ漢字で書かれていても、日本語としての意味と中国語としての意味が常に同じだとは限らない。同じ場合が多いけれども、中には意味のずれているものがあり、全く異なる意味のものもある。また、日本語としての漢語の中には、中国語として同じ形が存在しないものもある。その点から言えば、日本語の中の漢語をすべて中国語の知識で理解してもらっては困るのである。そうして、このことは、教える立場でも無視することができないのである。

つまり、教える立場では、どの漢語は日中両国語の意味が同じかということ、心得ておくことが好ましい。それとともに、どの漢語は日中両国語の意味がどのようにずれているかとか、どのように異なっているかということが明らかになっていけば、これもいろいろ役に立つ。更に、どのような漢語は中国語としては用いないということまで分かっているならば、これに越したことはないのである。

そこで、このように考えて考察を進めたのが、ここに取り上げる“中国語と対応する漢語”という研究である。そうして、日本語教育の初級・中級の段階で扱われる漢字音読語についてまとめたのが、ここに載せた“部類別漢語一覧”である。

2. 初中級漢語の選択

研究を進めるに当たっては、成果を早急に利用したいという考えから、漢語の選択に二つの条件を設けることにした。その一つは、外国人に対する日本語教育において初級・中級の段階によく出てくる漢語ということである。実際には、上級の段階になると漢語が著しく増すのであり、その点での取り扱いも重要なこと言うまでもない。しかし、それらについては、次の研究に譲ることとした。日本語教育において難しいのが初級・中級の段階であり、その範囲で役立つことが当座の目標と考えられたからである。

もう一つの条件は、漢字音読語に限定したということである。漢字は、音読のほかには訓読としても用いられている。そうして、その漢字の持つ意味に当たる日本語として固定したのが訓読であるが、それが、中国語でのその漢字の意味と同じものばかりとは限らない。また、訓読語の中には、逆に日本語からの外来語として中国語に取り入れられて、同じ意味に用いるものもある。しかし、それらについても次の研究に譲ることとした。漢字訓読語にまで広げると非常に範囲が広がるため、早急の利用が危ぶまれたからである。

そこで、まず漢語の選択であるが、このような条件を満たすことを考え、

初級・中級の教科書から選ぶことにした。それも、余り範囲を広げず、3種類の教科書で扱われている漢字音読語を取り上げることにした。3種類というのは、次の教科書、計10冊である。

(1) 早稲田大学語学教育研究所編“外国学生用日本語教科書”初級・中級
(計2冊)

(2) 国際基督教大学編“Modern Japanese for University Students”
I・II・III (計3冊)

(3) 長沼直兄編“標準日本語読本”I・II・III・IV・V (計5冊)

なお、ローマ字や平仮名で書かれている漢字音読語も普通に漢字で書かれているものは漢字に書き直して採録した。

こうして、手元に約1万枚のカードが集まることになった。しかし、これらのカードを検討すると、中には初級・中級向きでない漢語も含まれていることが分かった。そこで、全体の検討語数を少なくする意図も含め、さらに数を減らすことにした。そのときの条件が、2種類以上の教科書に扱われているということである。こうして、1種類の教科書だけのカードを除き、2種類以上の教科書に重複しているカードをまとめ、約2,000枚のカードとすることができた。この範囲ならば、予定された期間内に一応の結論を出すことも、それほど困難ではないと考えられたのである。

3. 辞書からの切り抜き

検討を進めるに当たっては、日本語としてのそれぞれの漢字音読語の意味について、中国語との対比を明らかにしなければならない。その場合には、それぞれの漢字語について、日中辞典や中日辞典がどのように扱っているかが一つの目安になると考え、次の二つの辞書を利用することにした。

(1) 香坂順一他編“現代日中辞典”(光生館)

(2) 香坂順一・太田辰夫共編“現代中日辞典”増訂版(光生館)

そうして、これらの辞書でその漢語に当たる見出し語を検索し、その部分を切り抜いてそれぞれのカードに張り付けることにした。

その場合、まず日中辞典のほうでその漢語に当たる見出し語を検索し、その項目を切り抜いて、そのカードに張る作業を進めた。次に、中日辞典によって各カードの漢語を中国語として見た場合の見出し語を検索し、それがあればその項目を切り抜いて、そのカードに張ることとした。また、該当する語がなければ、「なし」と記入することとした。

これは非常に手数の掛かる作業であったが、こうして、まず次のようなカードをまとめることができた。

(例) 1. 「以下」

日中 いか[以下] 20～／二十以下。小数点第2位～は切り捨て／小数点第2位以下抹去。5歳～は無料／五歳以下免費。～同じ／下同。～省略／下略；以下省略；以下從略。

中日 [以下]yǐxià ①…以下。＜股長～都有津貼＞係長以下は手当がある。②以下。＜～的話＞以下のことば。③より劣ったもの。＜～的人，更不足論了＞それ以下の人は更に問題とするに足りぬ。

この両者の記述を併せ考えると、日本語における「以下」という漢語について、次のような日中両語の対比を導き出すことができる。

(1) 日本語における「以下」という漢語の意味に当たる中国語や対訳は、同じ「以下」という漢字語である。

(2) 中国語における「以下」という漢字語の意味に当たる日本語や対訳も、同じ「以下」という漢語である。

こういう場合には、日本語における「以下」という漢語について、それを中国語における「以下」という語と同じ意味に解釈して差し支えないわけである。

そこで、こういう種類のカードには「S」と記入した。「S」というのは、意味が同じだということから“Same”と名づけ、その頭文字を用いた記号である。この場合、中日辞典のほうは、同じ漢字の日本語がそのまま訳語となるとときにその語を載せていない場合も見られた。(注1)しかし、日中辞典の

訳語に同じ漢字語の中国語が見られる場合には、一応「S」と記入した。こうして、相当多数のカード（最終的には、取り上げたカードの約3分の2に当たるカード）が「S」に分類されることになった。

4. カード分類の進め方

次に分類が容易なものは、日本語の漢語が中国語に存在しないものであるが、それは次のようなカードとなった。

（例）2. 「下品」

日中 げひん〔下品〕 ～な人／卑陋（卑鄙；鄙俗；下作；下賤；不雅；
齷齪；不文雅）的人。品性～である／品性下流。

中日 なし

この場合には、日本語における「下品」という漢語について、次のような日中両語の対比を導き出すことができる。

（1）日本語における「下品」という漢語の意味に当たる中国語や対訳には、「下品」という漢字語がない。

（2）中国語には、「下品」という漢字語そのものが存在しない。

こういう場合には、日本語における「下品」という漢語については、それと同じ漢字語が中国語に存在しないと考えてよいわけである。

そこで、こういう種類のカードには「N」と記入した。「N」というのは、その漢字語がないということから“Nothing”と名づけ、その頭文字を用いた記号である。この場合、中日辞典においては、同じ漢字の日本語がそのまま訳語となるとときにその語を載せない場合も見られること、前にも触れたとおりである。しかし、日中辞典の訳語に同じ漢字語の中国語が見られない場合には、一応「N」に分類した。こうして、また、多数のカード（最終的には、取り上げたカードの約4分の1に当たるカード）が「N」に分類されることになった。

問題は残るカードであるが、これについては、大きく次の2種類に分けることを目安として作業を進めた。その一つは、日中両国語での意味が著しく

異なる場合であり、もう一つは、日中両国語での意味が一部重なる場合である。

これらのうち、日中両国語での意味が著しく異なるものは、辞書の扱いから見分けることが容易であった。それは、当然のこととして、例えば次のようになるからである。

(例) 3. 「貧乏」

日中 びんぼう〔貧乏〕 彼は～だ／他很窮。～人ばっかしだ／盡是窮人。～になる／變窮。こんな～たらしい仕事はしたくない／不愛于這個窮事。彼は～人の出である／他是苦出身；他是貧家子。

中日 〔貧乏〕 pínfá とぼしい。〈経験～〉経験がとぼしい。

この場合には、日本語における「貧乏」という漢語について、次のような日中両国語の対比を導き出すことができる。

- (1) 日本語における「貧乏」という漢語の意味に当たる中国語や対訳には「貧乏」という漢字語がない。
- (2) 中国語にも「貧乏」という漢字語が存在するが、それは日本語の「貧乏」と全く異なる意味の語である。

こういう場合には、日中両国語での意味が著しく異なるため、日本語の漢語を中国語の知識で理解すると、誤解を招くわけである。

そこで、こういう種類のカードには「D」と記入した。「D」というのは、その意味が異なるということから“Different”と名づけ、その頭文字を用いた記号である。こうして、「D」に分類されたカードをまとめることになったが、その数は、最終的に見ても、余り多くはなかった。

5. 一部重複の場合の扱い

問題は、日中両国語での意味が一部重なる場合であるが、それは、例えば次のような形になるカードである。

(例) 4. 「単位」

日中 たんい〔単位〕 ～を決める／定單位。人口は千～で示してある／

人口以千爲單位表示。今年は何～取ったか／今年拿到了多少學分？

中日〔單位〕dānwèi ①單位。②行政機關の下部の事務・工作部門。
この場合の記述を併せ考えると、日本語における「単位」という漢語について、次のような日中両国の対比を導き出すことが可能である。

- (1) 「単位」という漢字語には、日中辞典の前半に見られる記述や、中日辞典に「①単位」となっているところから考えて、日中両国語における意味に同じ部分がある。
- (2) 日本語の「単位」という漢語には、「學分」という中国語に訳される意味があり、この場合には日中両国語での意味が異なることになる。
- (3) 中国語の「單位」という漢字語には、日本語で「仕事の部署」とでも訳される意味があり、この場合にも日中両国語での意味が異なることになる。

つまり、「単位」という漢語については、日中両国語での意味が一部重なってはいるが、両者の間にずれがあると考えらるべきである。

そこで、こういう種類のカードには「O」と記入した。「O」というのは、その意味が一部重なるところから“Overlap”と名づけ、その頭文字を用いた記号である。こうして、「O」に分類されるカードをまとめることができたが、中には、一方の意味が広く他方の意味が狭いために、後者が前者の中にも含まれるものも見られた。しかし、分類を余り細かくすることは適切でないと考え、この種のカードも「O」に分類した。

この場合、中国語での意味が広く、日本語での意味が狭い場合には、辞書の扱いが次のようになるわけである。

(例) 5. 「対象」

日中 たいしょう〔対象〕認識の～／認識的對象。少年少女を～とした雑誌／以少年少女爲對象的雜誌。

・中日〔對象〕duìxiàng ①對象。②相手。③結婚の相手。恋愛の相手。
この場合には、日本語における「対象」という漢語の日中両国語での対比